

環境思想・教育研究会 第2回研究大会

The Society for the Study of Environmental Thought and Education
The 2nd Conference

【大会案内・開催要項】

2014年9月20日（土）・21日（日）

於：大阪府立大学

中百舌鳥キャンパス B3-118（メイン会場）

◆ ご挨拶..... p.2

◆ シンポジウム..... p.3

「“いのち”、環境、科学文明から考える—生命哲学と環境哲学—」

○ 基調講演

森岡 正博（大阪府立大学）

○ 報告者

河野 勝彦（京都産業大学）／並木 美砂子（帝京科学大学）／福田 珠巳（大阪府立大学）

◆ フォーラム..... p.8

「将来社会を〈農〉と環境から構想する」

○ 登壇者

小貫 雅男（滋賀県立大学名誉教授）／古沢 広祐（國學院大学）／野田 恵（東京農工大学非常勤講師）

◆ 学生フォーラム..... p.14

◆ 一般研究発表..... p.15

◆ 会場案内..... p.19

◆ プログラム

○ 1日目（9月20日）

	13:00-	13:30-17:30	17:30-18:00	18:30-
	受付	シンポジウム	総会	懇親会

○ 2日目（9月21日）

9:00-11:00	11:10-12:40	13:30-16:30
一般研究発表	学生フォーラム	フォーラム

参加費：1,000円（学生500円） 懇親会費：4,000円

主催：環境思想・教育研究会、共催：大阪府立大学現代生命哲学研究所
＜お問い合わせ先＞ 第二回研究大会実行委員事務局：〒599-8231 大阪府堺市中区学園町1-1 大阪府立大学 A15-429（上柿研究室）。大会実行委員長：上柿崇英（t-uegaki@hs.osakafu-u.ac.jp）。
さらに詳しい情報は「環境思想・教育研究会 HP」まで（<http://environmentalthought.org/>）。

ご挨拶

環境思想・教育研究会では、2012 年に青森県は弘前にて初めてとなる研究大会を開催し、今年 2014 年の夏には、第二回研究大会を大阪で行うこととなりました。

会場となる大阪府立大学は、新大阪駅から地下鉄御堂筋線に乗り換え約 40 分の終点「なかもず駅」から、徒歩約 15 分の場所にあります。泉州堺は貿易・商業の拠点として古くから知られ、中世には環濠自治都市として栄えた伝統のある街です。「なかもず駅」から大学までの道は旧西高野街道で、空海ゆかりの高野山を詣でる人々が往来したかつての面影を残しています。キャンパスは日本書紀にも登場する百舌鳥古墳群に隣接しており、大型で美しい前方後円形の堀が残るニサンザイ古墳には徒歩で行くことができます。また日本最大の仁徳天皇陵(大仙陵古墳)も比較的近くにありますので※、合わせて観光や歴史散歩などもお楽しみください。

関東よりお越しの方には遠方となりますが、どうぞふるってご参加のほど、よろしくお願い致します。

(大会実行委員長 上柿崇英)



※各名所への行き方についてはこちらをご覧ください(http://www.sakai-tcb.or.jp/model_course/)。また南海線「堺東駅」、「中百舌鳥駅」、JR「百舌鳥駅」で一回 300 円のレンタサイクルが利用できるよう。詳細は(<http://www.sakai-c.net/>)。

I. シンポジウム

「“いのち”、環境、科学文明から考える—生命哲学と環境哲学—」

i. シンポジウム趣意

ここ 10 年を振り返ってみても、科学技術の進歩は留まることを知らない。例えば身近なところではスマートフォンやオートマティックな掃除機に始まり、果ては戦場で空爆を行う無人飛行機などに至るまで、高度な科学技術は私たちの社会に深く浸透している。確かに東日本大震災に伴う原子力発電所の事故は現代科学の在り方を世に問う契機となったかもしれない。しかし例えば環境分野においても、気候変動の緩和のためには、炭酸ガスを地中に埋め込む貯蔵技術や、将来的なエネルギー地の造成に向けて油を生産する藻類の改良など、やはり高度な科学技術を抜きには立ちゆかない状態となっている。

ここで考えたいのは、そのような現代文明と現代科学のもと、私たちが自然や生命というものに対して、どのように関わり生きていけば良いのかという問いである。換言すれば、それは私たちが“いのち”というものにいかに向き合っていけば良いのかという問いでもある。例えば先のように、環境問題は一見いかに技術を高めるかという問題であるかのようにも見えよう。しかし地域生態系のリスクとなる外来種の脅威、あるいは耕地や集落を保護するために野生動物を駆除し続けなければならない“共生”の現実、科学技術の高度化とは異なる次元の“いのち”の問題を浮かび上がらせる。また“いのち”という場合、私たち自身の中にある“いのち”のことも忘れるべきではない。現代科学の恩恵によって支えられてきたはずの現代社会において、人びとの生は本当に“豊かな”ものとなったのだろうか。生活が便利になればなるほど、人びとの感性や生きる気力が失われ、内面の豊かさの余地は縮小してはいないか。むしろそこには、“いのち”を摩耗させながら生きていかなければならない労働の切実な現実や、国家も地域も家庭すらも担えなくなりつつある福祉や介護という“いのち”の現実もある。さらには、新たな貧困などによる結婚できない世代、著しい晩婚化によって生殖医療技術に依存しなければ子孫を残せない世代の誕生、そしてそうした切実感から将来のリスクを未然に防ごうと遺伝子診断に手を出さずにはいられない、こうした“いのち”の現場も見過ごせない。

この問いが向かっていく先には、私たちが“人間として生きる”とは何かということになるだろう。私たちは、生命圏を織りなす生命の一員として生きるヒトであると同時に、数多の他者との関係性の中で生きる人間でもある。そして私たちの生は本来、親兄弟、親族など血縁によって関わる“いのち”、村の人、地域の人、学校、習い事、先生、その他お世話になった人びとなど生活の中で関わる“いのち”、病院、福祉施設、児童施設、デイケアセンター、葬儀場など特殊な空間で関わる“いのち”、農業、林業、漁業、畜産などにおいて関わる“いのち”、そして私たちを含む生命圏全体としての“いのち”といった、様々な“いのち”の形に結びついている。しかし現代文明のライフスタイルにおいては、例えば生死の現場が生活世界から巧妙に隠蔽されるように、私たちは“いのち”の営みから様々なレベルで切り離され、そのリアリティを持てずにいる。“いのち”のリアリティの欠如は、“生きる”ということへのリアリティに対しても深刻な影響を与えるはずである。

私たちは今こそ“人間らしく生きる”とはどういうことなのかを問い直し、将来の社会像を描いていく必要があるだろう。本シンポジウムでは“いのち”、環境、科学文明をキーワードに、このような問題について考えたい。

ii. 基調講演

「人間と自然のつながりを再考する」

森岡正博（大阪府立大学現代システム科学域教授 哲学・倫理学）

（１）サステナビリティについて

人類の存続を目標としたサステナビリティ学が日本でも進められている。しかしながら、工学などの自然科学を中心としたディシプリンが牽引してきたため、人文社会科学からの視点が希薄で平板なものになっている。サステナビリティ（持続可能性）を考えるためには、そもそもいったい何がサステナブルでなければならないのかを考察しなければならない。それは「すべての人間の尊厳を守ることができ、すべての人間が幸福を目指していけるような社会がサステナブルでなければならない」ということになるだろう。まず、この点について考察を行なう。

ところで、哲学の視点から見れば、そもそも、なぜ人類が存続しなければならないのか、それ自体が問われるべきテーマとなる。ハンス・ヨナスは、将来世代への責任を語ったが、そもそもわれわれには将来世代を産出する責任や義務があるのだろうか。現代的な生命の哲学の創始者のひとりと考えられるショーペンハウアーは、この問いにノーと答えるはずだ。彼によれば、人類はそもそも生まれてくるべきではなかったのであり、人類は「生への意志」を否定して、その結果として絶滅してもかまわないのである。現代の哲学者ベネターは、ショーペンハウアーを受けて、人類はなるべく早く絶滅すべきだと言う。これらの生命の否定の哲学を、われわれはいちどぐり抜けておく必要がある。そのうえで、いったん生まれてきたわれわれ自身の生命を、いかにすれば肯定することができるのかを考えていくべきであろう。

（２）人間のいのちの尊厳について

「尊厳」は現代社会のキーワードである。環境哲学においても、いろんな面において「尊厳」からのアプローチが必要であろう。そのうえで言うのだが、私は近代的な「人間の尊厳」を身体や、自然や、地球環境にまで拡大することが必要だと思うのである。私は「人間の尊厳」を拡張して、「人間のいのちの尊厳」として捉えていきたい。「人間のいのちの尊厳」は、(1) 人間がこの世で一度きりの人生を生きるという意味での「人生の尊厳」、(2) 人間が身体を持って生きるという意味での「身体の尊厳」、(3) 人間がつながりのなかではじめて生きていけるという意味での「生命のつながりの尊厳」という３つの尊厳によって構成されると私は考えている。このうち、本発表では、(2) の「身体の尊厳」と、(3) の「生命のつながりの尊厳」についてとくに考察したい。

「身体の尊厳」は、人間が身体を持っているということ自体に何かの尊さがあるとする

考え方である。人間の身体は両親より生まれ、大自然へと還っていく。その身体を人間が毀損しようとするときに、それを制限するものとしての尊厳を考えたい。「生命のつながりの尊厳」は、人間の生命が時間軸・空間軸への様々なつながりのうえではじめて尊さを持ち得るという側面に注目した尊厳である。まさにここにおいて、将来世代の存在の意義や、人間とその他の生命体とのつながりの尊厳が考えられる。「つながりの尊厳」というアイデアを広げていくとどうなるかを考えたい。人間と人間、人間と生命圏、人間と大自然のあいだのつながりの尊さとは何であろうか。また、この視点から見たときに、動物の権利の問題や動物園の問題はどのようにとらえられるだろうか。菜食主義についてはどうだろうか。それらのことについても考えたい。

（３）人間中心主義と人間非中心主義

人間中心主義と人間非中心主義の問題は、環境倫理や自然保護の分野で、ずっと考えられてきた難問である。人間は自分たちのために自然を守るのか（保全）、それとも自然それ自体の価値のために自然を守るのか（保存）、という問題である。私は、この二分法それ自体が間違っているという考え方をしている。というのも、保全の考え方も、保存の考え方も、それ自体として自己完結することはないからである。人間は自然と対立する存在であると同時に、自然を内在する存在でもある。人間は内なる自然を愛するがゆえに、外なる自然を愛するのである。そのように考えていくことで、人間と自然環境のあいだのつながりを新しい視点から見ていくことができるように思われる。

以上のような観点から、人間と自然の関係を多角的に考察したい。

iii. 報告

「環境といのちを守るために」

河野勝彦（京都産業大学文化学部教授 西洋哲学）

（１）サステイナビリティについて

1970年代に環境問題、環境保護が問題になったのは、人間による自然環境破壊が進み、このままでは地球生態系の危機だけではなく、そこに生きる人類をはじめとするさまざまな生物種に絶滅が危惧されたからであった。その点で、サステイナビリティ（持続可能性）は、重要な課題である。

サステイナビリティが問題となっているのは、人類の文明のあり方が問われているのである。現在の地球資源やエネルギーの大量消費型社会は歯止めがかかる気配がなく、このままでは持続することは不可能であり、循環型社会や再生可能エネルギーに依拠した体系への転換が求められている。同時に、私たちの生活スタイル、文明のスタイルの転換が求められる。かつてバブルがはじけた頃、中野孝次の『清貧の思想』がベストセラーになり、ワンガリ・マータイさんは、日本語の「モットイナイ」に私たちのライフスタイル転換の理想を見いだした。ただこのライフスタイルの転換は、一人ひとりが単独で行っても、あ

まり意味はなく、国レベル、地球レベルでどのように行うかが重要である。

（２）人間のいのちの尊厳について

「人間の尊厳」は、ルネサンスのピコや近代のカント倫理学を通して、1949年のドイツ連邦共和国基本法第1条第1項などにおいて、今や広く共通認識になっている。しかし、今日、生命工学の進歩によって、人間以外の生物の遺伝子操作が広く行われているが、この技術が人間生命にも応用されようとしている。

（３）人間／動物問題について、人間による動物の殺戮・食をどう考えるか

私自身は、動物の内的価値、尊厳を認めたいと思うが、それを実践するために動物食を止めるところまでにはなかなか行かない。ただ、どのような食の文化を構築していく必要があるかということは、これから大切ではないかと思っている。生物は、森岡氏の言葉で「生命のつながり」によって存在しているのであるから、動物による植物の菜食と動物同士の捕食の連鎖は自然のことわりであり、動物の一種である人間もこのことわりを逃れることには無理があると言えるであろう。しかしそれでも、どのような食のあり方、食の文化が求められるかは、問題にしようと思う。現在の食肉製造工場である工場畜産は止めて、動物福祉に配慮した有機畜産に転換することが求められる。

「生きものへの知的好奇心はどこに向かうべきか」 ——「文化的道具としての動物園」利用観——

並木美砂子（帝京科学大学生命環境学部教授 動物園教育）

人類が、外界への具体的働きかけによってのみ作物栽培や牧畜といった、計画的生産とそれに伴う定住生活が営めてきたことを考えますと、外界への知的好奇心それ自体は、自然環境を改変するための道具づくりを含めた行為すなわち、生産労働の契機になったと考えます。しかしながら、生産量をあげ、備蓄、流通できるようにしていく、そうした生産と備蓄、流通のための道具類が圧倒的に社会に蓄積されて、こんどは、その道具類存在が「文化的資源」として環境に配置され、人は生まれ落ちたときからその中で暮らし、知的好奇心を直接自然界に向けることが相対的に喪失されてきているのだと思います。

飛躍してしまうかもしれませんが、喪失されつつある「自然への好奇心」をもう一度吟味しつつ取りもどすうえでの、生きものとの肌を通じた関わり、すなわち直接的接触を含むあるいは、情緒性をもって「はぐぐむ」「やしなう」という感覚に基づく関わりが、積極的にもたらされるような契機をたくさん用意することが必要に思います。「見て楽しむ」「好きなもののみ見ようとする」「癒されることに心地よさを求める」だけでいくと、それは、「嫌いなものを見ようとせず、きたないものを無かったことにできる」感情を助長することにもなるかと思います。また、実際には、たとえば作物を育てて収穫する上では、阻害するものを除去することを余儀なくされるわけで、その除外行為において、つらさや命を奪う事への罪悪感を持ち続けることも、サスティナビリティには必須なことに思います。

生産することすなわち自らが生きていくことと誰かの命を偽性に行っているということ、その意味での罪悪感を持ち続けることが、自分の生命をだれかに使ってもらいたいと思いつける（何か役に立つことをみつける）ことの原動力になるように私は考えます。

このように、肌を通じた直接的接触や「やしなう」感覚が大事だとしても、それがいわゆる生産活動ではなく、社会の文化的装置としての「区切られた特殊な場」での経験は、逆に、そうした経験を人工的な環境で享受するだけの場であり続け、それを助長するのではないかという意見もあります。その考えの基本には、おそらく、そのような場を道具としてみている思想があると思われますが、それは、「〇〇のための道具」という考え方から「道具とともに」切り開かれる世界は何かというように視点を移すことで、道具の価値を創出し続ける、「利用観の変化を生み出すこと」に踏み出せるように考えます。

「走る身体と『自然』」 ——近年のランニング・ブームから考える——

福田珠己（大阪府立大学現代システム科学域 文化地理学）

最近、時間を問わず、町のあちこちで「走る人」を見かけるようになった。また、2014年2月24日の朝刊を見ると、各紙で前日に開催された第8回東京マラソンに関する記事が掲載されている。例えば、「東京マラソン 3.6 万の笑顔都心を駆ける」といった見出しで、首都東京で開催された巨大なイベントとして取り上げているのが特徴である。日本における市民ランニングをめぐる状況は、大きく変化しているのである。それに伴い、ランニングに関連するメディアも多様化し、また、様々な商品やサービスが提供されるようになっている。

本報告では、1980年代後半から緩やかに束ねられるような形で展開してきた「自然の地理学」の枠組みの中で、このようなランニング・ブームともいえる状況を考える。考察の出発点として注目したいのは、ランニングをめぐる近年の潮流の中でメディアを介して生まれてきた「美ジョガー」という存在である。女性ファッション誌 FRaU が先導する形で生まれてきた「美ジョガー」に注目すると、走る身体と外界との関係性や身体そのものの位置づけにある特徴を見出すことができる。ここでは、ランニングに関連するメディアの多様化とその特徴、および、関連する商品・サービスの展開という2点に焦点をあて、FRaUを中心とした女性誌を中心に、次の点について考察する。

（1）外なる「自然」として見出された対象はいかなるものか。それは、走る人とどのような関係をもつものなのか。

（2）自らの身体の内側に「発見」される「自然」とはいかなるものか。それは女性の身体とどのように関わっているのか。

（3）走るという行為を介して「自然」が内外に構成される際に、商品やサービス、技術はどのように関係しているのか。

このような作業を通して、現代日本社会と商品化という文脈のなかで、人間とそれを取り巻く、そして、その内部にある「自然」とのつながりについて探求していきたい。

II. フォーラム

「将来社会を〈農〉と環境から構想する」

i. フォーラム趣意

経済のグローバル化が進む今日、「成長戦略」の名の下、日本政府は経済の再生と競争力の強化を掲げて主導的に経済政策を主導している。そうした動きの中で宣伝される「国益」という用語も、なじみのある言葉となってしまった。従来の主力産業・工業・電化製品だけでなく、TPP 交渉への参入に象徴されるように、農業も国際的な自由競争の荒波に翻弄されていくことになる。その傍らで、スマートアグリに代表されるように、農業の仕組み（＝生産）そのものを市場経済に適合させる方向が追求されてきた。一見それらは効率的・合理的でよい手段のようにも思われるが、実は、自然生態系と農業との本質的関係を見失った、生命を機械へと従属させる農のあり方でしかないといえる。そこでは、生物の生存はみられても、生命のもつ活力（輝き）は失われている。

農をとりまくこうした状況は、生活の自立とは、生きるとは一体どういうことかについてあらためて問い直し、社会のあり方の再考を私たちに迫っているといえよう。それは資本主義システムが生み出す諸問題を抑制し、自分たちの生のための営みを自分の手に取り戻す試みでもある。

本フォーラムではこのような問題意識を念頭に置きつつ、将来社会のあり方について〈農〉と環境を基軸としながら構想し、人間が生きることの意味、人が育つことの意味を、社会や環境との関係、生命をはぐくむ〈農〉の営みとの関係において考える契機としたい。

ii. 報告

「近代超克への構想」 —「菜園家族」基調の自然循環型共生社会への道—

小貫 雅男（滋賀県立大学名誉教授、里山研究庵 Nomad 主宰）

（1）構想の問題意識と要諦

私たちの生きている現代社会は、分かり易く単純化して言うならば、「家族」、「地域」、「国」、「グローバルな世界」といった具合に、多重・重層的な階層構造を成している。最上位の階層に君臨する巨大資本が、あらゆるモノやカネや情報の流れを統御支配する。そしてそれは、それ自身の論理によって、賃金労働者という根なし草同然の人間の社会的生存形態を再生産するとともに、同時に社会の存立基盤そのものをも根底から切り崩しつつ、この巨大システムの最下位の基礎階層に位置する「家族」や「地域」の固有の機能をことごとく攪乱し、衰退させていく。このことが今や逆に、この多重・重層的な階層システムの巨大な構造そのものを土台から朽ち果てさせ、揺るがしている。これが今日のわが国社会の、そして先進資本主義各国社会の例外なく直面している現実である。まさにこれこそが、末

期重症の機能不全に陥った現代資本主義の実態であり、その治療の術を失い、ついには新自由主義的思潮に同化する一連の近代経済学の姿ではないのか。

・近代経済学の致命的弱点

近代経済学は、資本主義を所与のものとして捉え、その本質を問わず、その下での原因結果の「精密科学」を志向しようとして、今日の体制を無批判的に受け入れようという致命的な弱点を持っている。そしてそれは、金融および財政の枠内での分析手法とあれこれの処方操作に特化した、実に狭隘な市場経済論に収斂していかざるを得ない宿命を背負わされている。そして、1970年代以降、極端なまでの「経済の金融化」を許し、それを増長させてきたこれら近代経済学の根底に流れる思想は、プラグマティズムの思想であり、人間欲望の絶対的肯定である。これに深く根ざしたこの経済理論は、結果的には人間の欲望を無限に肥大化させ、人間の精神をことごとく荒廃へと導き、果てには世界を混乱と紛争の液状化へと陥れていく震源地にほかならない。世界の今日の事態を直視しさえすれば、そのことは自ずと頷けるはずだ。

・待たれる 21 世紀の新たな社会構想

人間社会の基礎代謝をミクロのレベルで直接的に担うまさにこの「家族」と「地域」の再生産を破壊する限り、人間社会のこの巨大な構造は、決して安定して存在し続けることはあり得ない。そうだとすれば、こうした社会の大転換の時代にあってはなおのこと、経済成長偏重のこれまでの典型的な「近代経済学」の狭い経済主義的分析の理論は言うまでもなく、19世紀マルクス未来社会論以来の旧態依然たる「生産手段の社会化」論の枠内にとどまっている限り、現代社会の深刻な実態をより深層からトータルに把握し、その実態に即した創造的で具体的な未来への道筋を明らかにすることは、ますます困難になってくる。私たちは今、このことに気づかなければならない。

賃金労働者は、果たして永遠不変の人間の社会的生存形態なのか。近代超克の鍵は、まさにこの問いに秘められている。ここで提起する自然循環型共生社会は、人間存在を大自然界に包摂する新たな世界認識のもとに、自然界の生成・進化を貫く「適応・調整」の普遍的原理（＝自己組織化）に則して形成されるものであり、近代の所産である賃金労働者に生産手段（生きるに必要な最小限度の農地・生産用具など）を再び取り戻すことによって生まれる抗市場免疫の新たな人間の社会的生存形態、つまり「菜園家族」の創出によってはじめて可能になる。この「再結合」によって創出される家族小経営は、農業部門または非農業部門を基盤とするものに大別される。厳密には前者を「菜園家族」、後者を「^{しょうしょう}匠商 家族」と定義するが、通常はこれら2つを総称して広義の「菜園家族」と呼ぶことにする。

このような人間の新たな生存形態を基盤に据えたこの社会構想は、今日のグローバルな市場原理至上主義「拡大経済」に対峙する、抗市場免疫の自律的世界の構築であることに注目しなければならない。この変革の道は、19世紀未来社会論以来の核心である、生産手段の社会的規模での共同所有を基礎に共同管理・共同運営を優先・先行させる上からのA型発展の道に対峙するところの、現代賃金労働者と生産手段との「再結合」によって創出される「菜園家族」基調のB型発展の道、つまり社会の土台の基礎単位を構成する広範な人々の日常普段の営為によって培われる、実に長期にわたる「静かなるレボリューション」

なのである。

・パラダイムの転換を阻む今日の分厚い思想的土壌、まずはこのことの自覚から

先にも触れた近代経済学は、その時々^{ホリスティック}の対症療法的処方箋を一時凌ぎに提示し得たとしても、経済・社会そして政治的側面をも全一的に捉え、経済・社会の構造的矛盾を人類史的視野から歴史的に分析し、そこから次代の萌芽を発見し、そこに依拠しつつ未来社会を展望する理論にまで昇華することは、その本質から言ってもあり得ないことである。むしろ資本主義を永遠不変の社会と見なし、それを矛盾の運動体として捉えようとはしないのである。そして現実社会が「末期重症」に陥っていても、自らはこの「永遠不変」の幻想を抱き続け、ひたすら対症療法的延命策に熱中し、社会の体質そのものを根本から変える原因療法を飽くまでも避けようとする。そして、多くの人々にも資本主義の永遠不変性への期待と幻想を振り撒き、主観的意図はともかく、客観的には社会を断崖絶壁の淵へと誘うはなはだ危険な役割を演じ続けてきたと言うほかない。まさにそこに、近代経済学の階級性格と、そこから来る本質的な限界をみる思いがする。

こうした近代経済学が今なお大手を振って罷り通り、その拠って立つ思想が、経済学者やエコノミスト、そして為政者や経済界のみならず、市井の生活の中にまで奥深く滲透し、人々の日常普段の思考と行動規範を著しく歪めている現状をみるに、ここでのテーマである「近代超克への構想」、つまり自然循環型共生社会への構想それ自体を阻む私たち自身の足下の思想的土壌が、いかに分厚く根深いものであるかを思い知らされるのである。21世紀の新たな社会構想は、何よりもまずこのことの自覚から出発しなければならない。

(2) 「菜園家族」基調の自然循環型共生社会への具体的展開

1. 現代賃金労働者^{サラリーマン}と生産手段（最小限度の農地・生産用具など）との「再結合」
～自然と風土に根ざした「菜園家族」の創出と「地域」の再生～
2. 週休2 + α日制の「菜園家族」型ワークシェアリング
3. 「菜園家族」を育むゆりかごとしての森と海を結ぶ流域地域圏^{エリア}の再生
4. 「菜園家族」・「匠商家族」^{しょうしょう}基調のC F P複合社会
～資本主義セクターC (Capitalism)、家族小経営セクターF (Family)、公共的セクターP (Public)～
5. 森と海を結ぶ流域地域圏^{エリア}の中核都市の再生 ～地方中核都市と農山漁村のネットワークの形成～
6. 地域再生に果たす国・地方自治体の役割

(3) むすびにかえて

いのちの思想を現実の世界へ～日本国憲法の三原則「平和主義」、「基本的人権（生存権を含む）の尊重」、「主権在民」の精神の具現化～

大地に根ざした精神性豊かな生活世界の創造

見失ってはならない未来社会への展望、そこへ到達する具体的道筋のたゆまぬ探求

※この講演では時間の関係上、「近代超克への構想」のごく骨子だけに絞って報告することにした。さらに関心のある方は、拙著『グローバル市場原理に抗する 静かなるレボリュ

ーション ―自然循環型共生社会への道―』（小貫雅男・伊藤恵子、御茶の水書房、2013年）を
ご一読いただければ幸いである。

「持続可能な共生社会のビジョン」 ——食・農・環境、私・公・共の視点から——

古沢広祐（國學院大學経済学部）

「環境の世紀」と呼ばれる今日の世界において、私達は人類社会の生存の道筋をどのように見出せるかが問われている。それは、近代工業文明や情報化社会の諸矛盾を克服する生命系重視の文明社会への転換と展望を見出すことである。そこでは、食・農・環境のつながりに注目し、地域社会の在り方から国家、国際社会の関係形成まで視野に入れた将来展望を見定めることが重要である。

地球の大地の3割近くを占める農耕地域（放牧地を含む）は、人類の生存を支える土台を成してきた。そこは、ちょうど日本語の里地・里山という言葉に象徴されるように、自然環境と人工環境が混じり融合し合う場所として、人為と自然が織り成す独特の共生的な場を形成し、人間社会を長らく支えてきた。歴史的にみて本来の農業（持続可能な農業）は、大地と交わる人類の営みとして存続してきたものであり、食糧を生産し、衣食住を支え、風土や文化を形成し、地域環境を保全する一翼を担ってきた。

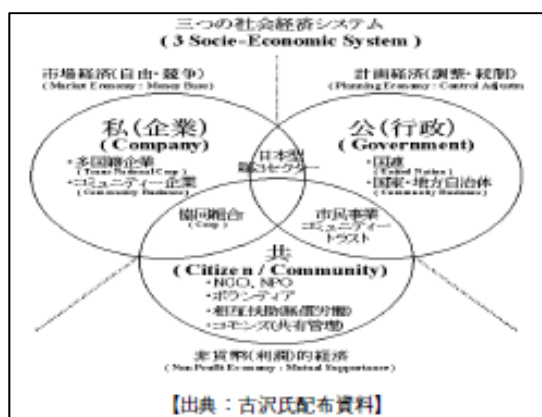
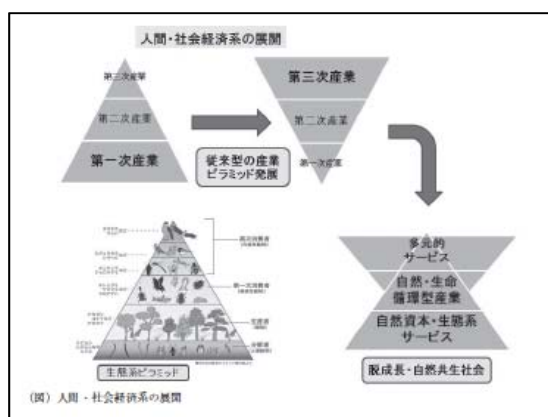
本来の農業は、自然を馴化しながら豊かな生物多様性を保持し、地域資源を有効に循環利用する持続可能なシステムとしての特徴や要素をもつ。過度な工業化、産業化（大量生産・大量消費）に土台をおく持続不可能な今日の社会から、どのように持続可能な社会へと転換していくか。それには、本来の意味の農の復権がきわめて重要である。それは、生命循環を重視する社会形成であり、農業を中軸とする有機循環・共生社会の構築である。

以下、大きく三点ほど今後に向けての方向性について提起したい。

（1）自然・生命産業としての第一次産業は、食・農・環境の緊密な関係性をふまえて、食料安全保障と環境（自然生態系）安全保障を融合させた「食・農・環境安全保障」の根幹を支えるものである。

私たちの身体は、大地・自然の循環の一部を成しており、とりわけ食と農によって基本的に支えられている。私達の健康は、健全な食により維持され、それはとりもなおさず環境に調和した農の営みに基づいている。さらに、内なる人間の身体環境と外なる地球環境とは、密接不可分につながっており、食・農・環境の緊密な関係性をあらためて再認識、再評価すべきである（身土不二の思想）。地球の多様な生態環境と調和した持続可能な第一次産業の形成こそが、私達一人一人の健康を維持するための基本であり土台である。

人類生存の根幹に関わる第一次産業、とりわけ農業の重視と再評価が求められている。それは、各国・各地域の生態環境に適合した持続可能な農林水産業の確立であり、それに基づいて各国・各地域の自立性と多様性を高めることで、地球環境全体の安定性を高めることにつながっているのである（食・農・環境安全保障）。



(2) 地域と社会の多様性に基づいた持続可能な農業、流通、消費の形成を促す。

本来の農業は、地域資源に結びついた生産活動である。そこで必要なことは、農産物を工業製品のように扱う農業生産の画一化や工業化の推進ではなく、各国・各地域の環境や資源循環に応じた多様な農林漁業の基盤づくりであり支援体制の強化である。また、その生産を安定させる流通や市場の形態としては、過度な商品化や市場最優先の矛盾を認識するとともに、生産と消費の安定的関係や相互啓発的な人間的関係を大切にする産消提携型の生産・流通・消費の有機的な結合の形成が重要である。

有機的連携は、農業内部のみならず農業と他のセクター、消費者との連携として形成する。有機性資源循環においては、畜産や農地がたんなる残さ・廃棄物の処理場所(捨て先)にならないよう、食生活、生活環境、生産様式のきめ細かい点検や安全性の向上と不可分に結びついたものとして構築すべきである。真の農の復権とは、生命循環の重視に基づく社会形成の根幹をなす土台づくりである。目指すべき社会の姿は、第一次産業を中軸とする有機循環の構築であり、安全性が確認可能な距離と範囲で地域連携を深め、生命の安全を基礎とする循環型社会の形成である(有機・循環型社会の形成)。

(3) グローバル化が進み一体化しつつある世界経済において、日本から世界に対して第一次産業の復権とグリーンエコノミー(環境調和経済)構築のために、世界各国の地域性を考慮した政策を提起する必要がある。とくにアジア地域や多くの途上国においては、文化的・地域的安定に大きく貢献してきた小農・家族農業を、健全な形で維持・発展させるための政策を重視していく必要がある。行き過ぎた競争や弱者切り捨てというグローバル経済の負の側面に対して、食・農・環境を重視する建設的な保全策(農業の多面的価値)を推進するべきである。とくに2014年は国連の家族農業年であり、その意味を世界的により広く深く認識しなければならない。

それぞれの国や地域が最小限守るべき農業維持の基本ベース(アグリ・ミニマム)の重要性を提起し、日本から世界に向けて具体的に提言をしていく必要がある。すなわち、地域の産業や経済を尊重し、国レベルの農業・食料主権を確認するとともに、地域レベルの自給、国レベルの自給の向上と、有機農業や持続可能な農林漁業への転換目標を定めることが重要である。さらに、こうした方向性を国際的に共通農業政策として各国に理解をもとめ、農業の意義と重要性について日本から世界に積極的に発信していくべきである。

<関連情報がネット公開中なので、参照いただきたい>

* 古沢「グローバリズムと日本の食・農・環境」(2011 年度 循環ワーカー養成講座第 6 回)

http://junkanken.com/wp-content/uploads/2013/12/junkan12_4_No34.pdf

* 古沢「自然循環の共生社会をつくる道すじ〜自然資本に基づく多様性経済へ」(ブックレット)『持続可能な社会をつくる共生の時代へ：農の力と市民の力による地域づくり』所収

<http://www.csonj.org/infoarchive/publication/booklet001>

「<農>的自然体験の教育的意義」 ——自然学校運動の実践から——

野田 恵(東京農工大学非常勤講師)

自然体験を中はじめとする体験的な学習活動を行っている「自然学校」が全国に増えている。その数は 2010 年の時点で 3696 校に上る。本報告では、この自然学校の実践事例を紹介しながら、<農>的自然体験の持つ教育的意義と、そういった活動を行う“場”をつくる社会的意義について考えてみたい。

自然体験というと、社会を変えるようなラディカルさに乏しいと批判されることがある。確かに、自然と触れ合い、個人の感性を豊かにすることを主張する自然体験は、環境問題を生み出す社会構造や政治的な課題、社会の格差を直接取り扱うことはほとんどない。そのため、自然体験型の環境教育に対して「脱環境問題化」しているという批判もある。

しかしながら、次のような理由で私は、自然学校運動は本質的にラディカルさを持つと考えている。1 つは、体験的な学習の重視にある。戦後日本では「系統主義」の教育によって「経験主義」の教育が否定される側面が幾度かあった。「系統主義」の知識観は、知識が科学の体系に即して教授されることで学習者は効率よく真理に到達するというものであった。体験を重視した学びには、このような知識観に対する批判と反省を促すという側面を持つ。

2 つには、自然学校運動で掲げられた「自然が先生」「自然が友達」というスローガンにみられるように、ここには自然は親しみ、学ぶべき対象としてとらえている事がうかがえる。近代的な開発が、自然を支配し開発の対象としてきたことを考えると、自然学校運動が構築しようとする人と自然の関係の新しさが理解できる。

3 つに、全国にある自然学校は団体ごとに特色ある多様な活動を行っているのだが、自然学校の間には緩やかなネットワークがあり汎用性の高い「スキル」を共有しあっている。多様性と分かち合いは、近代的な開発に対してラディカルさを持っていると考えられる。このような性格を持つ自然学校には、自然体験を共通の「ツール」として社会問題の解決、持続可能な地域づくりを行う主体としての可能性を見出すことができる。

しかし、一口に自然体験といってもその内容や質は多様である。これまで、自然体験の意義についての主張は数多くあったが、どのような自然体験に教育的意義があるのかについてはほとんど論じられてこなかった。筆者は経験の人間形成的な役割は「意味の網の目

と習慣が再構成する」点にあると整理し、どのような経験が人間形成に意義があるのかを考察し、＜農＞的自然体験に特に有意義な活動がみられると結論した。＜農＞的自然体験とは、“里”と“ヤマ”とが連続性を持ち一体となった農山村における生活的な自然との関わりのことである。その具体的なイメージとしては、長野県泰阜村「くらしの学校 だいらぼっち」の活動が参考になる。

＜農＞的自然体験が生み出す「生きた自然による予測を超えた自然とのかかわり」は、人間の経験を刷新させ、いきいきとした生を回復させる。さまざまな連関を持つ「自然の全体性」は、人間の意味ある世界を限りなく広げてゆく。自然の秩序は、道徳性の基礎となりうる。そして＜農＞には、自然を媒介とした人と人との関係がみられる。

個々の人間の成長という観点でも社会的な意義という観点においても、＜農＞的自然体験を展開する自然学校に、大いに注目すべき可能性があるのではないだろうか。

Ⅲ. 学生フォーラム

「身近な人間関係の変化と持続可能性」

会場となる大阪府立大学の学生が中心となり、演習（環境活動演習）の一環として「学生フォーラム」を実施します。若者たちの問題提起にぜひご意見ください。

i. 学生フォーラム趣意

21世紀に入り、急速にデジタル技術や、インターネットなどの新たなメディアが普及し、一人一人の人間が情報の発信者として世界に影響を与えたり、より遠くの人たちと瞬時にコミュニケーションを取ったりすることができるようになった。他方で、身近な人と直に会話をする頻度は減ってきており、若者を中心にコミュニケーション能力が低下しているという声も多く聞かれる。

また、大都市への一極集中の傾向が続いているなかで、新興住宅地では近隣住民との関係が希薄化し、地域の中での住民間のコミュニケーションも減っていると指摘されている。その一方で、地方では人口流出や高齢化などにより、地域コミュニティの維持が困難になってきており、孤立する住民が増えていると言われている。

実際、私たちのなかにも、同じ部屋にしながら兄弟間でメールのやり取りをして会話することが習慣になっている者がいる。また、日常生活でのあいさつがないなど、幼少期より近隣住民との交流が減ってきていると感じている者がいる。さらに地域でのコミュニケーションの希薄化が進むと、近隣住民間で他者への配慮に欠けた身勝手な行動をとって問題となるいわゆるご近所トラブルに発展することもある。実際、私たちの体験として、家の境界に有刺鉄線による子ども対策をすすめる者が現れるなど過激な行動もみられた。これらの経験を通して、私たちも実際に上記のような現代社会の傾向を実感している。

以前の日本の社会では、より密度の濃いコミュニケーションが存在し、他者への気遣いが今よりあったのではないかと考えた。そして、このような現状は、持続可能な社会形成

にとって多少なりとも障害となることが容易に考えられる。よって、持続可能な社会形成を考えるうえで、こうした社会環境の問題も無視できない。学生フォーラムでは、こうした内容についてディスカッションを行う。

IV. 一般研究発表

i. スケジュール

	小会場A（306）	小会場B（305）
9：00 - 9:30	「統合学としての新しい環境学の構築に向けて——ケン・ウィルバーの統合的アプローチの水環境問題への応用」 秋山知宏（東京大学助教）	「擬人化による自然理解：共感、代弁、憎悪」 熊坂元大（徳島大学）
9：30 -10:00	「自然観と『無痛文明論』的視座」 吉田哲郎（桐蔭横浜大学非常勤講師）	ワークショップ「身体・場所・正義」 吉永明弘（江戸川大学）／山本剛史（慶應義塾大学）
10：00 -10:30	「記憶と記録——インターネットに苦痛と他者は存在し得るのか」 吉田健彦（東京家政大学非常勤講師）	提題1：「場所」（すみか）を不当に奪われることに対する憤り（吉永明弘） 提題2：未来倫理における「身体」と「時間」（山本剛史）
10：30 -11:00	「『菜園家族』創出の歴史的意義——資本の自己増殖運動の側面から」 伊藤恵子（大阪大学・立命館大学非常勤講師）	

ii. 一般研究発表 要旨

○小会場A（306） 9:00-9:30

統合学としての新しい環境学の構築に向けて
——ケン・ウィルバーの統合的アプローチの水環境問題 への応用——
秋山知宏（東京大学大学院新領域創成科学研究科サステイナビリティ学教育プログラム 助教）

持続可能な発展のあり方に関する従来の議論の背後にあるロジックを掘り下げると、自然（客体、身体）と人間（主体、精神）を分離する、デカルト的二元論の発想が窺える。環境問題を超克するには、これまでとは全く異なる＜ポスト 近代社会の構築のための知（新しい知）＞に基づく環境学の構築と、それに基 づく＜次なる社会システム＞の構築が必要である（榎根 2006）。環境問題への対処が統合的な知を必要とすることから考えて、新しい環境学は統合的でなければならないと考えられる（榎根 2012）。本発表では、近年次々と発表されている新しい哲学や包括理論の中からアメリカの哲学者ケン・ウィルバーの統合的アプローチを応用し、持続性評価における包括的な枠組みを提案する。さらに、こ

の枠組みにもとづく事例研究として、シルクロードの 20 世紀における水環境の変化を、水利用（水資源開発および農業開発）、水循環、水文化（伝統コミュニティの変化）、水信仰（価値観の変化）という切り口から議論する。この事例研究から、＜ポスト近代社会の構築のための知（新しい知）＞の抽出を試みる。

○小会場A（306） 9:30-10:00

「自然観と『無痛文明論』的視座」

吉田哲郎（桐蔭横浜大学非常勤講師）

自然観の問題は多岐にわたり、文化的・思想的側面のみならず、科学（自然科学）の基底を成すものとしても重要である。本発表では、森岡正博の「無痛文明論」を援用して、環境美学における基本的な問題点を明らかにし、科学観へとつなぐ視座についても提示してみたい。

森岡の「無痛文明論」と自然観との関連では「プログラム化された自然」が重要なキーワードであり、究極的には自然を完全に模倣した人工的「自然」が想定される。環境美学における実践もこの文脈で捉えることができるように思われるが、そこに含まれる倫理的な問題点も指摘されるべきであろう。

日本においては「科学」と「理科」が混在しており、各々に内包される自然観・科学観の相違に注目しなければならない。科学の見直しが迫られるなか、日本的自然観への回帰が説かれることが多い。しかしながら、その陥穽に注視すべきであり、その際に「無痛文明論」的な解釈も可能であるように思われる。

○小会場A（306） 10:00-10:30

「記憶と記録——インターネットに苦痛と他者は存在し得るのか」

吉田健彦（東京家政大学非常勤講師）

東日本大震災の発生から、未だ終わりの見えないその被害のただなかにおいて、「絆」なる言葉がメディアに氾濫した。それは一方では傷つき苦しむ人びとを支えたかもしれないが、同時に、目を背けざるを得ないような、苦しみにのたうつ他者の姿を覆い隠し、心地よい物語として消費するための変換装置でもあった。特にそれが Twitter などの電子メディアと結びつくとき、その傾向は強まる可能性がある。しかし本当にそれだけだろうか？ このような批判的言説それ自体に、我々がメディアやネットの向こうで苦しむ他者を（私を苦しめない消費物として）仮想化するための言い逃れが潜んでいるのではないだろうか。

本発表では、他者との関係性が本来的に持つ苦痛や恐怖に焦点を当てつつ、ビッグデータやライフログといった情報技術／メディアが、我々が責任を負うべき他者との間に真の関係性を築き得るのかどうかを考察する。

○小会場A（306） 10:30-11:00

『菜園家族』創出の歴史的意義——資本の自己増殖運動の側面から」

伊藤恵子（大阪大学・立命館大学非常勤講師）

21世紀の新たな人間の社会的生存形態である「菜園家族」。本報告では、「菜園家族」創出の歴史的意義について、特に近代社会の存立を決定づける資本の自己増殖運動に刮目し、この側面から明らかにする。

現代賃金労働者と生産手段（最小限度の農地・生産用具など）との「再結合」による「菜園家族」の創出は、剰余価値の資本への転化のメカニズム、つまり資本の自己増殖運動のメカニズムを漸次衰退へと向かわせ、巨大資本はやがて質的变化を遂げながら縮小・分割・分散の道、すなわち資本の自然遡行的分散過程を辿っていく。

一方、こうした資本の自己増殖の衰退傾向は、巨大資本による科学技術の独占を困難にし、科学技術を資本の僕^{しもべ}の地位からしだいに解放する過程でもある。そして「菜園家族」基調のCFP複合社会の進展の中で、自然循環型共生社会にふさわしい新たな科学技術への転化が促されていく。それは、近代の申し子とも言うべき科学技術にとどまらず、文化、芸術、思想など人間の創造的活動にも及ぶ変革の広がりとその深さをもたらすことになる。

※ CFP複合社会…資本主義セクターC（Capitalism）、家族小経営セクターF（Family）、公共的セクターP（Public）。Cはきわめて厳格に規制され調整された資本主義セクター。Fは週休2+α日制のワークシェアリングによる三世代「菜園家族」を主体に、その他非農業基盤の自営業を含む家族小経営セクター。Pは国や都道府県・市町村の行政官庁、教育・文化・医療・社会福祉などの国公立機関、その他公共性の高い事業機関および国有・公有の事業体、各種協同組合やNPOなどから成る公共的セクター。

○小会場B（305） 9:00-9:30

「擬人化による自然理解——共感、代弁、憎悪」

熊坂元大（徳島大学）

動物や植物はもちろんのこと、山や川といった生態系、さらには地球そのものまでもが、何らかの意志や欲求を持った存在であるかのように語る言説が、しばしば私たちの耳目に触れる。こうした言説は、発話者の自覚の有無はさておき、人間の自然における特権的地位を否定し人間も自然の一部に過ぎないとする、非人間中心主義の表現として理解されることが多いように思われる。だがこれは、むしろ自然を擬人化することによって、人間中心主義を拡張していると見ることもできよう。擬人化された自然は私たちの共感能力に訴える力を増し、擬人化を通じて私たちは自然の価値や目的を代弁する。そして自然の擬人化は自然を損なう人や行為を、より邪悪なものとして私たちの前に描き出すことで、人びとの自然保護への熱意を燃え上がらせると同時に、人びとのあいだの対立を激化させる。

本報告では自然保護に対してどのような功罪をもたらさうかを論じるとともに、擬人

化の不可避性について考察する。

○小会場B（305） 9:30-10:30

ワークショップ「身体・場所・正義」

本ワークショップは、近年の環境倫理学の議論をふまえて、「身体」「場所」「正義」という切り口から、新たな議論の展開を図るものである。提題者は、それぞれライトの環境プラグマティズムとヨナスの未来倫理を研究してきた。ライトとヨナスの議論はスタイルも内容も全く異なるが、実践的な倫理学のあり方を志向している点で共通している。二つの提題が交差するところに、これからの環境倫理学の姿が示されるだろう。

提題1：「場所」（すみか）を不当に奪われることに対する憤り

吉永明弘（江戸川大学）

アンドリュー・ライトによれば、環境倫理学の仕事の一つは、公衆に環境保全のための動機を与えることにあるという。従来の倫理学者からすると、この見解は、なぜ環境を保全すべきなのか、の検討ではなく、環境保全を自明のものとして、それをいかに公衆に啓発するか、という運動論のように見えるかもしれない。しかし、なぜ環境を保全すべきなのか、という問いは、あまりにも一般的すぎて、そこには、すでに環境保全の動機をもっている人とそうでない人の区別がない。本報告では、すでに環境保全活動を行っている人がもつ動機の例を紹介し、それを、「場所」（すみか）を不当に奪われることに対する憤り、というフレーズとして提出する。特に、「不当に」という部分において、目的の不適切さ、価値の釣り合わなさ、手続きの不適切さなどを含む、正義問題が存在することを示す。これによって環境問題が根本的に正義問題であることを示す。

提題2：未来倫理における「身体」と「時間」

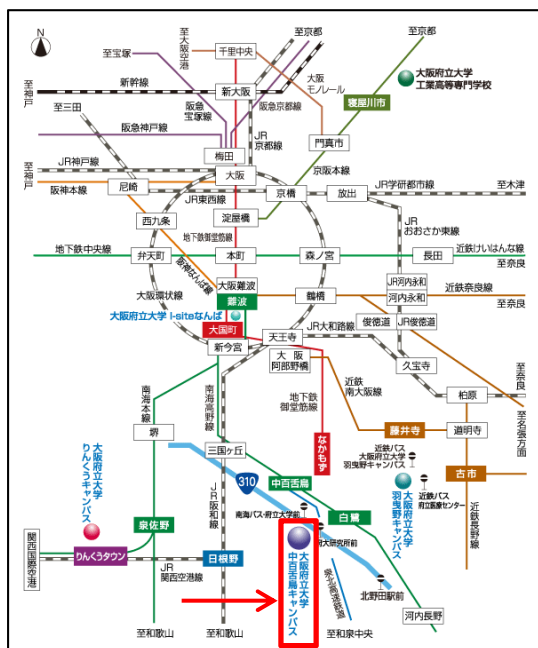
山本剛史（慶應義塾大学）

ハンス・ヨナスは「この子をこの世界へと産み落としてしまった」という親の子に対する責任を、責任の原型と見なした。ヨナスは、この原型から政府を親に比するようなパターンリズム的な倫理を展開するのではなく、独自の自然哲学に基づけて、人類のいのちの代々のつながりに掉さす類の科学技術に対する規制根拠とすることによってその未来倫理を構成した。すなわちヨナス未来倫理は、環境や身体への侵害が世代をこえて影響をもたらす事態が、均一に機械的に刻まれる時間の果てにようやく将来世代を仮想したりしなくても、子孫達とのつながりにおける悪であることを明瞭に指摘している。

本提題では、吉永氏の「場所」の環境倫理においても健康被害等の点で課題となっている「身体」を、子孫たちとの関係という「時間」の観点から取り上げる。双方が補完し合うことで、現代の課題に呼応する環境倫理を開く道を見いだせればと思う。

V. 会場案内

i. 大阪府立大学 中百舌鳥キャンパス



- 南海高野線「白鷺駅」下車、南西へ約 500m、徒歩約 6 分。
- 南海高野線「中百舌鳥駅」下車、南東へ約 1,000m、徒歩約 13 分。
- 地下鉄御堂筋線「なかもず駅(5 号出口)」から南東へ約 1,000m、徒歩約 13 分。
- 南海高野線「中百舌鳥駅」・地下鉄御堂筋線「なかもず駅」から南海バス(北野田駅前行 31、32、32-1 系統)で約 5 分、「府立大学前」下車。
- 南海本線「堺駅」から南海バス(北野田駅前行 31、32、32-1 系統)で約 24 分、JR 阪和線・南海高野線「三国ヶ丘駅」から南海バス(北野田駅前行 31、32、32-1 系統)で約 14 分、「府立大学前」下車。
- 関西国際空港から南海バス(関西空港リムジンバス)で「中もず駅前(北側)」まで約 63 分、南海バス(北野田駅前行 31、32、32-1 系統)に乗り換えて約 5 分、「府立大学前」下車。

ii. メイン会場、小会場A・小会場B、懇親会会場について

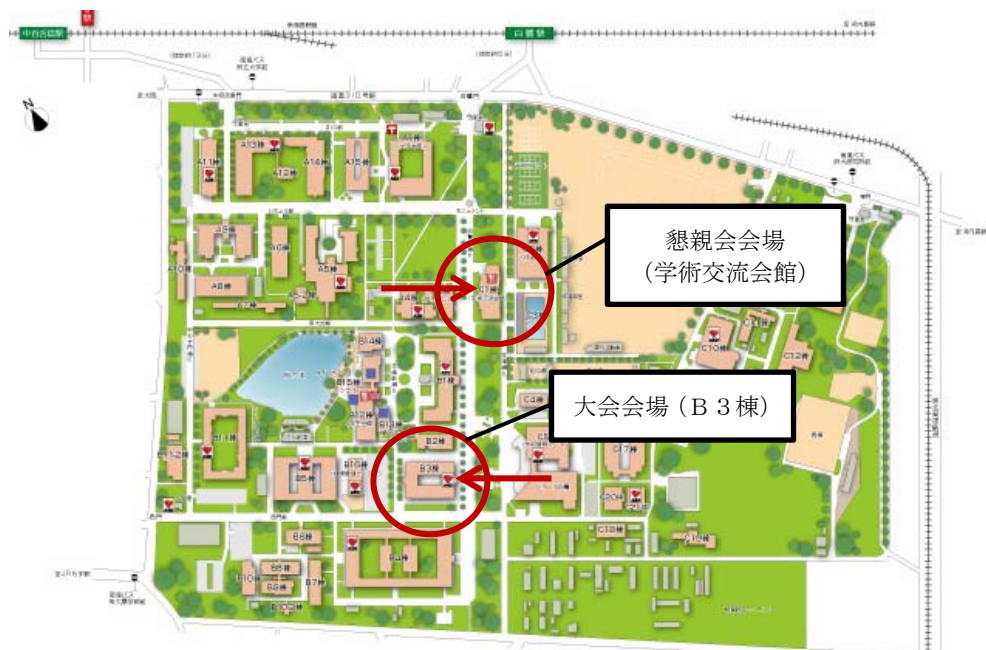
メイン会場 B 3 棟 1 F 118 番教室

小会場A B 3 棟 3 F 306 番教室

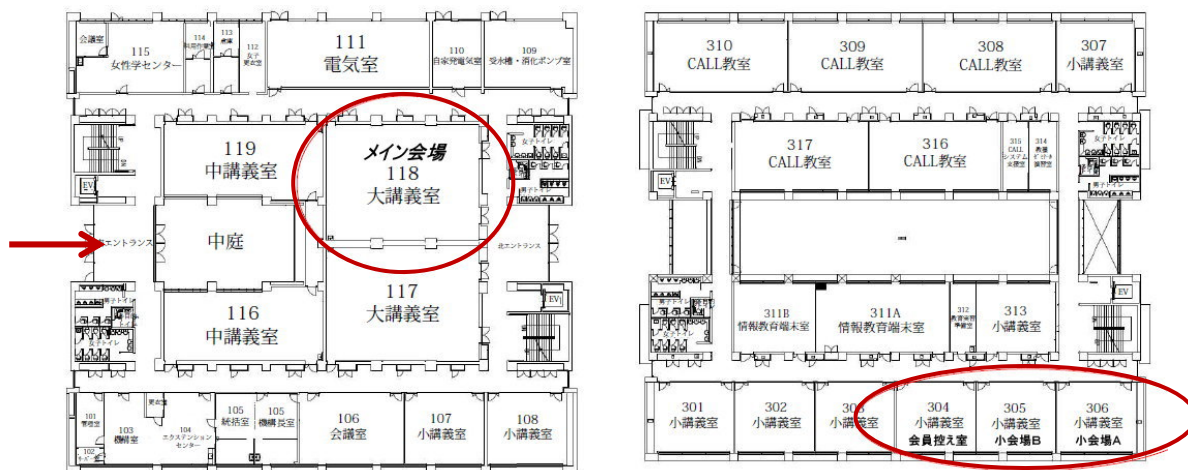
小会場B B 3 棟 3 F 305 番教室

会員控え室 B 3 棟 3 F 304 番教室

懇親会会場 学術交流会館 1 F サロン



↑ キャンパスマップ B3棟（大会会場）および学術交流会館（懇親会会場）の位置



↑ B3棟の1F 大講義室（メイン会場）、304（会員控え室）、305（小会場B）、306（小会場A）。

※上図のキャンパスマップとは方位が逆になっているのでご注意ください※

iii. 宿泊について

キャンパス近辺には、東横INN堺東駅を除いてほとんど宿泊地がありません。それ以外の場合、地下鉄御堂筋線沿い、あるいは南海高野線沿いでより大阪近辺の宿泊地が候補としてあげられます。

東横INN堺東駅

南海高野線堺東駅西出口より徒歩6分

シングル ¥5,800(¥6,264)～¥6,300(¥6,804)

〒590-0952 大阪府堺市堺区市之町東6-2-14

TEL : 072-282-1045 FAX : 072-282-1046

(<http://www.toyoko-inn.com/hotel/00071/hotelinfo.html>)